



# シャンダイア物語

～智慧の峰～

福田 弘生

Anima Solaris



## 第六章

# サムサラ砦

ソントール大陸の中央部に帝国の背骨のように隆起して、東西に連なる大山脈の西の端と、サルパート山脈の東に延びる支脈が最も近づいた所にサムサラと呼ばれる村がある。このあたりがちょうど北の将とソントール本国の勢力圏の中間にあたるため、村は不幸にも両方の経済圏の辺境という運の悪い環境に置かれていた。それでもサルパート山脈から流れ出る水を集めて畑には細かく治水がなされ、秋には作物が豊かに実って大地を彩った。広々とした畑の中には小さな林が点在し、その木々の中には太い木材で組まれた村人の家が、乾いた風を避けるようにして建っていた。畑を貫く道には使役用の馬と農具を載せた車が行き交い、村人達は土ぼこりを防ぐために頭巾から目だけを出して毎日懸命に働いた。

しかしそうして収穫された作物は、村の北にある闇の神バステラ神の教会を通じてソントール本国と北の将の要塞両方に送られてしまうため、人々の暮しはとても苦しかった。もつともその教会にいるバステラ神の神官達は、いつも村人達よりさらに不幸そうな暗い顔をしていた。なぜならば北の将の要塞にいる高位の神官ギルズンは、不思議なくらいに他の神官をもてあそぶのが好きで、過去に何人も呼びだされては帰らぬ人となっていたのである。そんな希望の無い神官達の残酷な気晴らしは、時々サムサラの村人達に不幸をな事件を起こす事があったが、黒の神官に逆

らうには農民達は無力過ぎた。

北国の長い冬もようやく峠を越えたある日、そんなサムサラの村の西側の平野に、突如戦士の大陸カインザーの大軍が南風にのってやってきた。快速の騎馬軍団は到着したその日のうちに、村にあるバステラ神の教会を焼き打ちにした。抵抗しようとした神官達は、あつという間にことごとく切り伏せられた。村人達は初めて見る狂戦士の来襲に恐れおののいたが、教会の焼き打ち以後カインザー人達が村に押し寄せる事は無かった。教会を追われた生き残りのバステラ神の神官達は、もちろん北の将の要塞ではなく、本国からやってくる噂されているソントール軍を頼って村を逃げ出した。

カインザー軍団は、来襲の翌日から村とサルパート山脈の中間近くにある小高い丘の上に砦を建設し始めた。心配した村人達はこっそり偵察に行ったが、カインザー人達はそんな村人の姿を見かけてもいたって無関心だった。どうやらこの戦士達は、敵の戦士以外は相手にしないらしいという観測が村人達の間にも広まり、一時的にバステラの神官からも開放された人々は心のなかでこっそり安堵のため息をついた。しかし名にしおう凶暴なカインザー軍の事である。何をしでかすかという不安は村人の心を去らなかつた。そのためにカインザー軍への村人による偵察は、それ以後おっぴらと言っても良いくらいに大胆に続けられる事にな

った。

村人達が観察して判断した結果、どうやら総指揮官は茶色の鎧の将軍らしかった。この将軍は驚くほどに騎乗がうまい。将軍は実に巧みに馬に乗ってかけまわりながら、配下の軍団を指揮してわずかの間に砦を建設中の丘のまわりに大量の低い柵と溝を作った。その柵と溝が設置された範囲は数日のうちに丘を中心に数キロ四方に及んだ。ただし唯一西側、サルパート山脈に向かう方角にだけは一直線に道が残されていた。戦いのためにつくられたのは明らかだが、作られた柵はあまりに低く防壁というにはお粗末なくらいに簡素な作りで、とうていソントールの軍隊と戦う用意には見えなかつた。溝も幅が狭く、深さはあるが板を敷いて渡る事も埋めてしまう事もたやすいだろう。

一方、やや若いもう一人の指揮官らしい赤いマントの将軍に率いられた軍隊は、丘の上に石をつんだり木を切って並べたりして何とか砦を造ろうとしているらしかったが、どうにも不器用で形にならず数日で放り出して北に進軍して行った。やがて、村の北方にある北の将の補給基地が次々と襲撃を受けたという情報が村に届くようになり、数日おきにたくさんの略奪物資を引いた馬達が砦に入ってしまった。どうやら噂以上にカインザー人は凶悪な盗賊らしい。村人はそんな者達が村の近くに駐屯している事にあらためて恐怖した。

赤いマントの将軍が去った後の丘の上には、数百人の柄の悪い一団が残った。何者だろうと村人達はいぶかしんだが、この一団は手際よく見る間に簡素な砦をつくりあげた。そして砦の建物が出来上がると、僅かの見張りを残してサルバート山脈を目指して出かけて行った。最初はカインザー軍を恐れていたサムサラの村人達だったが、大ソントールの民である事を誇りにしている者達は、この一団の一見不真面目にも見える臨戦態勢にいささか不満を覚えた。そしてはやく本国の軍が到着して散々にやつつけてくれればいい、と顔をあわせるたびに話し合うようになった。

そんなある日、村に明るい知らせが届いた。ソントール本国の大軍があと二週間程で到着するというのだ。しかも指揮をしているのが名門ゼンダ家の当主グルタス・ゼンダだという情報が伝わると、村は都の有名な貴族を迎えるための準備にわき返った。娘のいる親達は特に期待に胸をふくらませた。ゼンダ家の血筋でなくともいい。その家来にでも気に入られれば、家族はこれからの裕福な暮らしを約束されるのだ。その期待の前に、カインザー軍への恐怖などは吹き飛んでいた。なぜならばゼンダ家の大軍の前にはカインザーの兵など全くの無力であり、粉微塵に粉碎されるのが明らかだからだ。

カインザー王国の機動部隊。ロッティ子爵、クライバー男爵

の二人の貴族が率いる三万の軍団がサムサラに到着しておよそ二週間がたった。そろそろソントール軍が到着すると思われる頃、サルパート山脈からの物資の輸送路を整えて元盗賊の頭のバンドンが砦に戻ってきた。約三百人の部下も乗馬の鞍に糧食やバンドンが選んだ実用的な資材を大量に携えて後に続いている。

バンドンは戻るとすぐに主立った部下を連れて、砦の前の見晴らしが良い高台に上がった。そしてそこからロツティが作りつつある平たい防衛線をざっと眺めると、すぐに頭をかかえて横に並んだ部下に愚痴った。

「おい、あのお粗末な柵は結局あのままなのか。ロツティは二週間もあれを並べてたつてのか。なんなんだありやいったい」

バンドンの指さす先には、確かに出発時の柵と溝がその設置範囲を拡大しただけで延々と続いている。

「俺はこの戦役が終わったら逃げ出してまたカインザーで盗賊をやるうと思っていたんだが、こいつは考えにやあいかなあ。カインザー人の狂い方は尋常じゃねえ。ソントール人のほうがよっぽどマシだ」

バンドンが怒りながらうろろろしていると、バンドンと一緒に戻ってきた部下の一人が、やっと気がついたように大声をあげた。

「こりゃあ馬の訓練場だ」

「なんだと」

バンドンは足を止めてその部下をうんざりした顔で睨んだ。

「あつしのせいじゃねえですよ、お頭。ロツティの名がつく者は結局馬の事しか頭にねえって事でさあ」

部下はロツティがつくった柵を指さしながら説明した。

「おいらのおやじはロツティ家の牧場の馬番の一人だったんでね。だから知ってるんですが。馬つつのあ、ほんとは丸太もまたげねえほど臆病なんです。ロツティ家じゃあそいつをうまく訓練して、障害物のある所でも平気で進めるようにするんですが、その訓練場がこんな感じでした。もつともこいつはバカでか過ぎますけどね」

バンドンはそう言われて、眼下の数キロ四方におよぶ障害物をじっくりと眺めてみた。

「なるほどな。ソントールの軍は一見大した防御もされていないこの平野に進軍してくるだろうが、馬でも人でも進むのにかなり難儀をするはずだ。しかしロツティの騎馬軍団は平気でこの障害物の中を走り回って攻撃も退却もできるとわけか」

他の部下達も感心してその広大な障害物の平野を眺めた。しかしバンドンはこの作戦に否定的だった。

「こんな方法が何日ももつもんじゃあねえだろう。敵の数が多過ぎる。一箇所突破されれば、後は堰を切ったように押し寄せてくるに違げえねえ」

そう言うのとバンドンは砦の留守番をしていた部下に聞いた。

「ところでクライバー戻ったのか」

「いんや、まだできあ」

「なんだと」

「北の将の駐屯地をさんざん荒らし回って、その物資を送つてきてますよ」

そう言うって部下は、砦の貯蔵庫のほうを指さした。

「それはわかっているが、しかしいつまでやってるんだ。もうソントール軍は目の前に来てるんだぞ。しかもあんまり刺激すると北の将の兵まで来ちゃうじゃねえか。ちくしょう、カインザー人つてのはどうしてこうも加減を知らないんだ」

バンドンのあまりの剣幕にその部下が恐る恐るたずねた。

「お頭、逃げますか」

「アホ言え。ただ逃げたんじゃこれからどこに行っても相手にされねえ。ロツティとクライバーにくらいついてソントールの軍団を散々なやませてから、危なくなったら俺達だけささっと退散するんだ」

バンドンはそう言うのとテキパキと指示をして部下を砦に展開させた。

（こうなったら自分達の身は自分達で守るしかねえぜ。カインザーの狂戦士どもと心中はごめんだからな）

サルパートの吟遊詩人サシ・カシユウは、智慧の峰の北部にある小さな山寨に捕らえられていた。妹の死を知り、そのかたきの山賊の頭を刺殺した夜。マスター、モントに別れを告げて、一人で北の将の要塞への道を辿った翌日の出来事だった。愛馬を引きずるような急ぎ足で山中を進んでいたサシを、前日の山賊達が待ち伏せて襲った。サシ自身もそれなりに戦いの仕方を知っていたが、いかんせん開いたばかりの目が光になじまず、行動が思うようにいかなかった。わずかな抵抗の後、あつという間に縄で縛り上げられてしまったのは仕方の無いところだろう。山賊達の山寨はサシが捕らえられた場所のすぐ近くにあった。

サシをとらえた山賊達は山寨でサシを殺すもりだったらしいが、それが有名な吟遊詩人のサシ・カシユウである事を知ると、殺さずに北の将の要塞に売り飛ばそうと閉じ込めた。それはそれで願ったりだとサシは思った。元々北の将の要塞を目指していたのだから。

サシは山寨の最上部にある小さな部屋に閉じこめられた。いわばほとんど用が無い部屋である。寒さに耐えるためにつくられた建物はさすがにすきま風一つ無いしっかりした建て付けだったが、古くなった木の小さな穴から差し込むわずかな光が空気の中に筋をつくり、昼になるとサシはそのまぶしさに目をすがめた。

(光というのも面倒なものだ)

サシは当初、北の将の要塞に辿り着いた後、バルトールの旧首都ロググのバルトールマスターの配下であるイサシと交渉して要塞に潜入するつもりだった。その後は自分の美声をうまく活かして、北の将に接近する機会をうかがえばいい。しかし山賊達のおかげで、ルドニアの霊薬が無い状態でイサシと危険な駆け引きをする必要が無くなった事はむしろ幸運と言えるかもしれない。

しかしそのサシの思惑とは裏腹に、監禁のわずか二日後にモント達の山寨襲撃であつかりと解放されてしまった。後でサシが知った所によると山賊達は抵抗する暇すらなかったらしい。訓練されたバルトール人というのはこういう狭い場所での戦闘が恐ろしく強い。サシは襲撃が始まったらしい階下の騒音を聞きながらおおよその状況を悟った。そして、物音が止んだ後、監禁された部屋の扉を開けて見慣れた老人が入ってくるのをぼんやりと待ち構えていた。

「またあんたか、今度はどこに連れていく」

モントはサシの元気な姿を見つけて嬉しそうに笑った。

「ジンネマンの洞窟の話聞いたことがあるか」

モントはそう言って水の入ったカップを床に座ったままのサシに渡した。サシは受け取って口に含んだ。

（ああ、うまい。しかし水を汲んでくる程の余裕があると  
は、さすがにたいしたもんだ）

「ああ、巨大な洞窟だ。サルパート人なら誰でも知っている」

「そこに入る。一緒に来て欲しい。どうやらおまえが目を開ざし続けた八年間の経験が必要になりそうなんだ」

サシはカップをコトリと床に置いた。

「断るね。俺は誰のためにも自分の力を使うつもりはない」

モントは険しい顔で言った。

「ならば、おまえの妹のためにやれ。北の将ライバーを滅ぼす」

サシは驚いた。

「本当にできるのか」

「そのために我々はおまえを呼びに来た」

サシはしばらく考えていたが、やがてゆっくりと腰を上げた。

「なる程な。おまえが主とおおぐベリック王や、カインザーの狂戦士達以外にはソントールの將軍と戦う勢力はこの世界にいない。俺にも選択肢は無いという事か」

サシはモントに続いて山寨の通路を歩きながら、制圧された山賊達に意外に死者が少なそうなのを見てなぜかホッとした。

モント達がサシ・カシユウを連れて去った翌日、一人の小柄な男がその山寨をたずねた。男は山寨の堅く閉ざされた門と高い塀をしばらく眺めていたが、ひよいとジャンプしてその塀に取りつくくと、やすやすとよじ登った。中からの

攻撃は無かった。男は身軽く中庭に降り立つとツカツカと庭の中央まで歩いて行って立ち止まった。数組の矢が砦の窓から一斉に男に狙いをつけた。男はニヤリと笑うと腰に手を当てて大声でどなった。

「ここは北の将ライバーの兵達と、つながりがあると聞いてきた。頭の子イダルはいるか」

しばらくして、山砦の窓から痩せたイタチのような顔の男が顔を出した。

「サイダルのお頭は死んじまった」

中庭にやってきたイサシという名のバルトール人は、素早く山賊の表情を観察した。かなりおびえているように見える。

「それではサイダルの次の頭は誰だ」

「ジンバだったが、ジンバも殺されちまって、いまじゃおいらが頭だ」

イサシは顎に手をやって薄い髭をすごいた。

「二人は誰に殺された」

「サイダルは吟遊詩人に殺された。ジンバを殺つたのはバルトールマスターの一味だ。モントとか言った。サイダルのお頭を殺つた吟遊詩人をひつつかめえてたんだが、そいつを取り返しに来たんだ。化け物のように強ええ奴らだった」

イサシはうなづいた。

「相手はバルトールマスターだ。おまえたちの手に負える者

では無い。ところでその吟遊詩人は何か薬のようなものを持っていなかったか」

「うんにゃ知らねえ、持ってもバルトールマスターにとられちまったべえ」

「そうか」

イサシは曇った空を見上げて考え込んだ。

（どうやらザイマンのマスター、メソルの使いは役に立たなかったようだな。ルドニアの霊薬でサルパートをゆさぶれると思っただが、モントの手に渡ればサルパートに渡る。よし、この件からは手を引こう。後はギルズンと狼達がどう対処するのか見物といくか）

イサシは新しく頭になった男にたずねた。

「モントはどっちの方角に向かったんだ」

山賊は中庭の男が自分達には興味が無さそうな事を知ってホツとしたように答えた。

「ここの山を北西に」

イサシは北西の空を振り仰いだ。峰の上のほうを灰色の雲が覆っている。また雪と嵐が来るようだ。

「ふむ。そっちには何がある」

山賊の頭は大声で答えた。

「ジンネマンの大洞窟だあね」

イサシはそれを聞くと何も言わずに踵を返して山寨の門に向かった。そして山賊達が驚いて見守る前で、巨大な

門を片手で楽々と押し開けて視界から消えた。

イサシが遠くあおいだ大洞窟はサルパート山脈の最北方の中腹にある。洞窟には魔物が住むとも果てが無いとも言われ、過去に幾多の冒険者が踏み込んだが、まだ誰もその果てを見たものはいない。その巨大な洞窟を背にしたジンネマンの村にシャンダイアの要人達が続々と集結しつつある。

最初に到着したのは、最も遅くサルパート入りしたバルトールの少年王ベリックだった。ベリックは、腹心のフスツとその部下の少数精鋭で移動しているために移動速度が速かった。途中で馬と話ができる少女エレーデを拾ったため多少遅くはなったが、エレーデも山育ちだけあって旅に慣れると機敏についてきた。

ベリックと行動を共にしてからの数日、この不幸な生い立ちの少女は暗くしずんでいたが、ベリックと話しているうちに明るさを取り戻してきた。やはり山賊の中での暮らしは辛かったのだろう。ベリックはバルトールに伝わる方法で加工した薔薇の花をこの少女に贈った。赤い薔薇は摘みたてのような美しきで、少女の胸で花開いた。

次に到着したのはやはりバルトール人、モントの一行だった。吟遊詩人サシ・カシユウは、ここで初めてベリック王と対

面した。そしてベリックの後ろに隠れるようにして様子を見かけた。うかがっているエレーデに、なんとか話しかけようとした。しかしエレーデは父を殺した伯父を遠くから見つめ、決して答えを返そうとはしなかった。

続いて一人のバルトール人が村の近くの森の中に潜伏した。失われた都ログのバルトールマスター、マサズの腹心のイサシである。イサシは最初旅人を装って村にさりげなく足を踏み入れようとした。しかし村はずれで見張りをしているバルトール人を見て、あわてて道から逸れて茂みに身を潜めた。

（あれはモントの部下ではないぞ。殺気が数段違う。おそらくはカインザーのバルトール人だ）

そこでイサシはハッと気がついた。

（とすればフスが来ているのか、フスは王を名乗るベリックのそばを離れないはず。それならばここにはベリックがいるぞ）

イサシは高鳴る鼓動を抑えながら、慎重にベリック王を確認できるチャンスを待つ事にした。

最後に到着したのが、巻物の守護者スハーラと冠の守護者ブライスに率いられたエイトリ神の巫女達だった。雪に消え入りそうな可憐な乙女達は村の教会と、そのまわり

の家々に分かれて宿泊した。シャンダイアの国々の相談役魔術師マルヴェスターは、サルパートの聖王マキアの名のもとに村を戒厳令下に置いた。

村の中心にはエイトリ神の教会がある。信仰の国サルパートの教会は、村人達が寒さを避けて屋内で会議が行えるようにとの目的でつくられているため、しっかりしたつくりと規模を持っている。巫女達が到着した夜、一同はその教会に集った。主立った者達がエイトリ神の祭壇の前に並び、二三百人の巫女達が椅子に座った。全員が揃った事を見届けた後、巻物の守護者スハーラが進み出た。そして若い巫女は、決意のこもった声で宣言した。

「私達は今、ふるさとサルパートが滅びるか生き残るかの瀬戸際に立っています。なつかしい峰を覆う白い雪を赤く染め上げた魔法使いギルズンを倒すために、私達は今日ここに集いました。エイトリ神の英知を信じましょう。ジンネマンの暗闇を通り抜けて必ず牙の道に辿り着きましょう。本当の戦いはそれからなのです」

そう言うときスハーラは一息ついて、目の前の巫女達を見渡した。そしてマルヴェスターにたずねた。

「いつ出発いたしましょうか」

マルヴェスターはスハーラの決意に少し目を赤くしながら答えた。

「急ごう。セルダン達はもう牙の道に着く頃だろう。あの寒

がりをあまり待たせるわけにはいかない。明日の朝、エルデ  
イ神の神託をおおいで出発だ」

横に並んでいたブライスが驚いたようにマルヴェスターを  
見た。

「俺がセルダンよりも寒がりだつて事を、まさかあなたが忘  
れているわけはありませんよね」

マルヴェスターはその言葉を予期していたように応じた。

「船乗りが早起きだつて事は知っているぞ」

「いや断じてそれは迷信です。船乗りが起きるころ、太陽  
がのぼってくるのです」

マルヴェスターは興味深そうに髭をつかんだ。

「そんな馬鹿な事はない」

ブライスが反論しようとした時、教会の中に世にも美し  
い歌声が流れた。ブライスも、マルヴェスターもスハーラも驚  
いて振り向いた。今まで教会の一番後ろの椅子に座つて目  
を閉じていた痩せた年齢不詳の灰色の髪の方が、立ち上が  
つて両手を差し伸べるように体の前に上げて巫女達に向か  
つて歌いかけていた。歌はサルパートの古い民謡のようだつ  
た。ある時は月の光のように美しく冴え冴えと、ある時  
は春の日差しのように暖かくほがらかに。高く、低く、太  
く、切なく。魔法のように声をあやつりながら、サシ・カシ  
ユウは巫女達の座る椅子の間の通路を歩いた。そして部  
屋の中央で立ち止まると静かに両手を振った。明日の洞窟

への冒険に恐怖を憶えていた巫女達は涙しながらその歌に加わった。やがて教会に美しい合唱が流れた。

翌朝同じ教会で、ブライス、スハール、ベリックの三人の聖宝の守護者は、力を合わせてエルディ神を呼んだ。女神が現れるかどうか心配しながら一同が見守る中、美貌の女神は色とりどりの衣を何枚も重ねて身にまとった姿であらわれた。その美しさに、同席していた数人のリーダー格の巫女の間からため息があがった。ホツとしたような声でブライスがうなった。

「そのセンスはいかがなものでしょうエルディ神」

「あら、いきなりごあいさつねブライス」

女神は軽く宙に浮きながら一同を見回した。

「おはよう、冠と短剣と巻物の守護者。そして神に声をもらった吟遊詩人と馬と話す者。よく揃ったわね、マルヴェスター。でもほんとうにこんな危険な挑戦が必要なのかしら」

マルヴェスターは険しい表情で答えた。

「ギルズンを一刻も早く止めなければなりません。それにどうやら北の将も重い腰を上げてサルパートを本気で滅ぼす戦いに出陣するようです」

女神も心配そうにうなずいた。

「そうね。もうこれ以上の攻撃を受けたら、エイトリが限界にきてしまうわ」

スハーラが恐る恐るたずねた。

「エルディ様。私はまだエイトリ神に正式に巻物をゆだねられてはおりません。どうすれば良いのでしょうか」

エルディは美しい眉をひそめた。

「それはちよつと微妙な問題なの。守護者を終生と定めていたルールはたいして問題じゃない。それは変える事ができるわ。でも、あなたは巻物の守護者としてここサルパートで一生を終える事ができるかしら」

スハーラはうなずきかけて真剣な顔のブライスに気がついた。

「そういう事よ。もちろん巻物はあなたの手にゆだねないとこのサルパートの峰は救えない。だから直線的なセルダンとブライスの宣言のおかげでリラの巻物は無事あなたに譲渡できた。ごめんなさいねブライス」

「いいえ、かまいませんとも我が母上」

「母上はやめて。さて、守護者の交替についてはエイトリも文句は言わなかったわ。ただ、あなたをブライスと共にザイマンの私の元に渡すのが恐いのよ。ただでさえエイトリの力は弱まっているのですもの」

ブライスがちよつと怒った声で口をはさんだ。

「じゃあ、俺達は一生離ればなれって事なんですか」

しばらくエルディの美しさに見とれていたベリックが、ふとブライスを見て事も無げに言った。

「シャンダイアが統一されればいいんでしょう」

「そうよ。賢い子ね」

エルデイは飛び出してベリックを抱きしめた。ベリックは目を白黒させながら真つ赤になった。エルデイが離れると、ベリックはエレーデを見てバツが悪そうにせき込んだ。エルデイはクスリと笑うと次にエレーデに歩み寄った。

「ベルザ・デザ・ラ・フォンタン、これはおまじない。馬と話す者よ、あなたの人生には辛いことがたくさんあったでしょう。でもここにいる者たちを信じなさい。そして王との約束を忘れない事よ、それがあなたに力を与えてくれるわ」

ベリックは不思議そうにたずねた。

「王って誰です」

スハーラが気がついてエレーデに近寄り、その肩を抱いて耳元でささやいた。

「彼は賢いけれど、でもやはり男の子よ。たくさんの約束をさせなさい。あなたを守ってくれるわ」

エルデイとスハーラは微笑んだ。そしておずおずとエレーデも微笑んだ。ベリックは何か大切な事に気がつかなければいけない事を知ったが、それが何かわからなかった。

マルヴェスターが女神にたずねた。

「その子について気になる事があるのです。エイトリ神は今回の事態を予測してその子を我々につかわしたのでしょうか」

「そうでは無いと思うわ。でも気まぐれではありえない。馬と話す能力を人間にさずけるのはとても大変な事なの。何か彼なりの予測があつたんだと思うわ」

「ふうむ。あなたの国ザイマンを統括している、バルツールマスター、メソルについてはご存知ですか」

「いいえ、私の島にいるはずだけどまだ会った事が無いの」

エルディはブライスに向き直った。

「ブライス、ここでの戦いに決着がついたらザイマンに戻ってらっしゃい。私の島をもう一度固めなおさないといけないわ」

ブライスが嬉しそうに笑った。

「あなたに抱きつきたくなくなってきましたよ。雪と山、そして洞窟。俺の神経はそろそろ限界にきてます」

「そうね、サルパートを解放したら一度だけ抱きついていい事にします」

ブライスは目を丸くした。エルディは少し浮き上がると皆に向かつて言った。

「どうかくれぐれも気をつけてください。とても大事なところにさしかかっているようです。私はエイトリと一度話し合ってみます。彼の力があなたたちには必要になるはずですから」

そこで、ベリックがたずねた。

「一つ質問していいですか」

「もちろんよ。短剣の守護者」

「船乗りは太陽が登るから起きるんでしょうか、それとも船乗りが起きるころ太陽が昇ってくるんですか」

エルデイは大きな目をパチクリした。

「誰がそんな疑問を思いついたの」

「サイマンの王子とマルヴェスター様」

ベリックは子供らしい率直な投げやりさで答えた。

「もちろん、船乗りが起きるから太陽が登るのよ」

後ろで聞いていたマルヴェスターが愕然とした。

「まさか、そんな」

エルデイは腰に手を当ててマルヴェスターを睨んだ。

「あたしは暁の女神よ。みんなが起きていない時に出てきても誰も見てくれないじゃない。その私が太陽を連れてくるのよ、ねえみんな」

そう言って、エルデイはスーラの後ろに並んで、驚きの表情で見つめていた他の巫女達に笑いかけた。緊張していた巫女達の顔にはほほ笑みがうかんだ。女神は若い巫女達に軽く手を振ると、踊るように身をひるがえしてあつという間に消えた。教会の中にあたたかい沈黙がおりた。マルヴェスターがちよつと怒ったようにベリックを問い詰めた。

「なんであんな事を聞いたんだ」

「だってこれから戦いに赴くのに、疑問は残っていないほうがいいでしょう」

そう言ってブライスを見上げた。大柄な冠の守護者は腕

を組んで満足そうだった。

「ちろん。一番大切な事さ」

マルヴェスターはプリプリしながら教会を出ていった。それを見送ってスハーラが笑いながらベリックに声をかけた。

「ありがとうベリック。皆の緊張がとけたわ」

その日の午後、サルパートの巫女達はジンネマンの大洞窟の入り口に立った。入り口の高さは約三十メートル程もある。のぞき込むと洞窟の中には幾重もの段や裂け目があり、単純な丸い穴では無かった。そしてその複雑な形は、入るとすぐに冒険者達から光を奪ってしまうだろう。ブライス、スハーラは皆に松明を持たせて、適当な間隔で火をつけさせた。これとてどれ程役に立つかはわからず、そうみやみに使わけにもいかない。そしてサルパートの命運を背負った一行は、光になごりを惜しむように洞窟に入って行った。

先頭に立つのは、エイトリ神に声をもらった吟遊詩人サシ・カシユウ。八年間閉じられていた澄んだ瞳は、暗闇の中に道を探して今はすっかり見開かれている。

サシの後ろにはサルパートをおさめるバルトルマスター、モントが十人の部下とともに列の先頭を守っている。

その後ろに智慧の峰の巻物の守護者スハーラ。若い乙女の胸にはリラの巻物が入った帯が巻かれ、服の内側にルド

ニアの霊薬が大事にしまわれている。

スーラの左側を守るように進むのはザイマンの冠の守護者ブライス。シャンダイアの導き手であるエルデイ神を守り神に持つ好漢は、今はその力を銀の輪に宿して額に輝かせている。

その二人の後ろに約百人の年長の巫女達が続く。巫女達の手には松明が持たれ、背中の袋に一週間ぶんほどの食料が入っている。

列の中段には短剣の守護者ベリックと馬と話す者エレーデ。そしてフスツと四人の精鋭が七頭の馬を引いて従っている。エレーデは時折馬に低い声で話しかけて臆病な動物を落ち着かせていた。

ベリック達に続いてさらに百人の若い巫女が続く。一人一人手を繋ぎあつて暗い洞窟の中をけなげに進む。

そして列のしんがりを翼の神の一番弟子マルヴェスターが守っていた。マルヴェスターは最後尾の巫女達にしきりに冗談を言って笑いを誘い出していた。

やがて洞窟はゆるやかな下りになり、外の光が見えなくなつた。

サルバート山脈の北の果て。やがて山脈が尽きようというなだらかな丘陵地帯をカインザーの王子セルダンは進んでいる。付き従うのは武術師範のベロフ男爵と、その配下の

精銳ベロフ抜刀隊。このあたりまで来ると空気は顔に巻いた布越しでないと吸えないくらいに冷たい。天気の良い日は、地表に貼り付いた雪の表面が乾いた風に吹き飛ばされて、空中でキラキラと輝く。水色のマントの若々しい王子は頬を赤くしながらサクサクと進んでいった。雪の積もった木々を右手に見ながら丘を登り、道を降り、何度目かの小さな森に分け入った時、前方の木々の間に北の将の軍隊が見えた。

「ギルゾンのお迎えだね」

セルダンには横に並ぶベロフに微笑んだ。

「挑戦状はちゃんと届いていたようですね」

ベロフもニヤリと笑った。北の将の軍は徒歩だった。雪が多い丘陵地帯では馬の動きはにぶい。むしろ実践的な部隊が来たとみるべきだろう。セルダンが気配を数えた。

「森の中に三百。右手の丘の向こうに三百」

ベロフがうなづいた。

「そんなところでしょう」

「三倍だね。一人で三人しか相手にできないや」

「残念な事です」

黒いマントの抜刀隊は一斉にマントをはね上げて白刃を抜いた。それと呼応するように森の中から北の将の軍が一斉に押し出してきた。ベロフは短く部下に指示した。

「迎え撃て。馴れない雪の中を無理に走る事は無い」

抜刀隊はおたがいを背にした大きな円陣を組んだ。それを見て側面に隠れていた北の将の軍も攻撃に移った。やがて北の将の軍は三分の一の数のカインザー軍を押し包んだが、まるで風車にはじかれる水のように白刃の元にバタバタと散っていった。それを見て丘の上で様子を見ていた北の将の軍の指揮官らしい男と騎馬の一隊がカインザー軍をめがけて切り込んできた。セルダンはカンゼルの剣を高く掲げて迎え撃った。すれ違う一瞬にセルダンは敵の指揮官を馬の下から切り上げた。指揮官は絶命してドウと雪の中に転げ落ちたが馬は無傷で走り去った。

「お見事」

残りの騎馬の兵を一掃しながらベロフが褒めた。

アタルス、ポルタス、タスカルの三兄弟はたいくつそうに戦況を眺めていたが、突然走り出して、森の中に駆け込むと黒い頭巾のバステラの神官を引きずって戻ってきた。神官は寒さと恐怖で震えていた。セルダンは剣をしまうとひきすえられた神官に言った。

「ギルゾンに伝言を頼みたい。迎えは無用と伝えてくれないか」

神官はガクガク震えながらも大きく頭を振った。

「我が命つきる事でギルゾン様は部隊の全滅をお知りになります。殺してください」

セルダンはちよつと驚いた。

「その必要は無いだらう」

しかし神官はガバツとひれ伏して懸命に懇願した。

「剣の守護者、その魂を奪う剣で私の命を絶ってください。我が魂をギルゾンの手の届かぬ所に葬ってください」

セルダンはペロフを見た。ペロフがうなずいた。セルダンはしぶしぶ剣を構えた。

「わかった。そのとおりにしてやろう。だがその前に聞かせて欲しい事があるんだ。北の将の元にいるギルゾンと僕が倒したゾノボート。どちらが魔力が上だったんだ」

神官はこの質問に不思議そうな顔をしたが、しばらく考えて答えた。

「魔法の性質が違います。高位の神官の中ではガザヴオック様があらゆる面で突出している事は確かですが、他の高位の神官の力の比較はとても難しいでしょう」

セルダンは質問を変えた。

「では黒の魔法使いの中でおまえが最も仕えたいのは誰だ」

これには神官は即答した。

「それはもちろんガザヴオック様」

「次は」

「南の将の元にいる黒い剣の魔法使いザラツカ様」

「ふうむ。ゾノボートがもし生きていたら」

「その次です」

「ギルゾンはどのへんにあたる」

「その次の次、東の将の元にいる黒い巻物の魔法使いレリーバ様の次です」

「よくわかった。それでは安らかに眠るがいい」

そう言ってセルダンは剣を振りおろした。神官は嬉しうに笑った顔で息絶えた。今度はベロフが不思議そうにセルダンにたずねた。

「今の質問は何のためです」

セルダンは黒の神官が雪の中に散らした赤い血を眺めながら答えた。

「僕が倒したゾノボートとギルゾンの比較が知りたかったのさ。ゾノボートは確かに怪物だったが、数万という神官兵の軍団を組織していた。もしかしたら戦いや組織に関する考え方は一番僕らに近かったのかもしれない。それに引き換えギルゾンはたった一人で行動している」

ベロフがうなずいた。

「なる程。ガザヴォックが最も仕えたい相手というのは純粹に力への崇拜でしょうが、南の将の元にいるザラッカと、死んだゾノボートには神官達をまとめる一種の人望があったのかもしれない」

「そう、言い換えればギルゾンはゾノボートよりはるかに異質。僕らにとって全く計り知れない相手というわけだ」

セルダン達の後ろでサルパートのエラク伯爵が震えながら一部始終を見つめていたが、決して引き下がる事は無かつ

た。ペロフが笑顔を見せてたずねた。

「エラク伯爵お見事な態度です。牙の道はまだ遠いのですか」

細身の伯爵は丘の向こうを指さした。

「あそこに煙があがっています。あの下あたりが牙の道の入り口になります。温泉が湧いていて谷に沿って流れ降り、谷は流れに沿って北の将の要塞まで続いています。寒さはここほどではなく、洞窟もいくつかあってギルゾンが来るまで待機できるでしょう」

「よし、行こう」

セルダンはその言って歩き出したが、すぐに舌打ちをした。

「しまった」

「どうしました」

「もう一人いた。最後の一人、ギルゾンよりも仕えたくない魔法使いについて聞いておけば良かった」

ペロフはしばらく記憶をさぐった。

「ユマールの魔法使いですか」

「ああ、黒い冠の魔法使いだ、名前を知ってるかい」

「いえ」

二人は顔を見合わせた。

「マルヴェスター様にあとで聞いてみよう」

ロツティとバンドンがこもるサムサラの砦に向かったのは、グ

ルトス・ゼンダという名の壮年の將軍だった。家格は高いのだが、グラン・エルバ・ソントールの厳しい出世争いに破れ、この北方での戦いに家運の挽回を期していた。それだけに意気込みはある。一族郎党十二万の大軍を率いてはるばる北の戦線に遠征してきた。

ルトスは大軍の中央に馬を進ませていた。体格の良い黒い髭の將軍は、行軍の間中上機嫌で大声を出してまわりの者に話しかけていた。

「わしがサムサラにたむろしているカインザー貴族どもをけちらせば、老いぼれのライバーを隠居させて北の將だ」

隣に馬を並べた長男のジョンズも同意した。

「カインザー軍は三万との報告ですので、我が軍の四分の一。相手になりますまい」

ルトスは当然と言ったふうに笑った。

「わざわざ華やかなセントーン戦線から、こんな田舎にやってくるのだからな」

やがてゼンダ軍はサムサラの村で情報を仕入れ、村人達の様々な誘いを丁寧に通じた後サムサラの砦へと向かった。ルトスは戦闘の前に部下達にはめを外す機会を与えるほど愚かでは無かった。十万を越える大軍は、ゆつくりと地形を値踏みするように進軍し、堂々とロッセイの準備した柵の前に長大な陣を敷いた。

長い時間をかけて何列にも重なった堅固な陣を築くソ

タール軍を、砦の櫓からロツティは眺めていた。

「ううむ。さすがにソントール本国の兵は装備も万全、あの隊列の見事さから言って志気も高い。これは手ごわいな」

バンドンが隣でぶつぶつぼやいた。

「これほどのやる気だとは思わなかったぜ。ソントールにやあ將軍が星の数程いるから、たまにやこんな奴も出てくるんだろう。だが見かけ通りの力があるかどうかまでは試してみないとわかるまい」

「それはそうだ。クライバーから連絡があった。数日で戻るそうだ」

ロツティはそう言つて櫓を降りる階段に向かった。バンドンもひよいひよいと体を揺らしながら続いた。

「そいつは嬉しい。もつとも今の兵力差じゃあ、クライバーが戻るまでもつかどうかも怪しいもんだが」

ゼンダ軍は翌日から攻撃を開始した。迎えるロツティの軍は約一万五千。ゼンダ軍の先陣の騎馬軍団は手順通りにまずはロツティの巡らした柵に突進したが、馬が柵を越えられずに立ち往生した。すかさずバンドンの部下達が矢をあびせる。そして溝と柵で迷路のようになった道を通つて、ロツティの騎馬部隊がゼンダ軍を襲撃した。ロツティの軍は柵と溝で分断されたソントール軍の中を縦横に暴れ回って引き返した。ゼンダ軍は数に物を言わせて追撃にかかったが、ロツティの馬たちが軽々と越えた溝に馬がはまって混乱に

陥った。約半日、この行動が繰り返され、ゼンダ軍は山のよ  
うな死者と負傷者を出して退却した。しかし砦に戻ったロ  
ッティはさすがに息を切らしていた。

「敵の数が多すぎる。このままでは人はともかく馬がつぶ  
れてしまう」

バンドンが手にしていた酒の瓶を大事に懐にしまった。

「休んどきな。夜は俺達の出番だ」

元盗賊の頭はそう言って、三百人程の部下を連れて夜  
襲にでかけた。ロッティが砦から監視していると、やがてゼン  
ダ軍の幕営の各所から火の手があがった。昼間に確認して  
おいた陣営の状況から察するに食料集積地を狙い撃ちし  
たらしい。

「なるほど、効果的に焼いてくれるものだ」

こうして一日目が終わった。

ゼンダは翌日は歩兵を繰り出して、柵の取り外しと、板  
を敷いたり溝を埋めたりして障害物を取り払う工事にか  
かった。バンドンがそれ見たことかと言った感じで両手をあ  
げた。

「だろうな、ああすると思ったぜ」

ロッティは弓兵を繰り出した。馬に乗る兵達は小さな弓  
をたくみに操るが射程距離は短い。馬を柵の隣まで走ら  
せ、馬上から狙い打った。

「よい練習だ」

ロツティが満足げにうなずいた時、大地をとどろかす轟音が響いた。ロツティの騎馬軍団の中心部が砲撃されて、土煙が舞い上がった。馬は驚いて立ち上がった。バンドンが頭をかかえた。

「しまった、大砲を引いてきていたのか。あんなもんを引きずり回すのは西の将の参謀のバーンって奴だけかと思ってた」

ロツティもこれには少し困ったようだった。

「しかし砲数は少なく狙いは不正確だ。今夜あれを引いている車を壊してきてくれ」

「ああ、わかった」

その日はロツティとバンドンの部隊は敵兵がハリネズミのようになるまで矢を放ったが、柵は徐々に取り外され、溝は埋められていった。やがて夜になった。待つてましたとバンドンが夜襲にでかけたが、しばらくして逃げ帰ってきた。

「おかしな罫が陣のまわりに張られている。ありゃあ魔法だな、サムサラの村から逃げた神官どもがへんなものを仕掛けやがった。なあロツティこいつは手ごわいぞ。クライバーが戻るまで退却しようぜ」

ロツティは困ったような顔になった。

「退却だと」

「こいつらの目的は俺達だ。北の将の要塞にはいかない。それなら俺達の陽動作戦の役割は充分に果たしただろう」

「いや、引けばおそらく北進する。十二万のソントール軍が北の将に合流すれば、たとえ王子達がギルゾンを倒しても、サルパートは滅びる」

「だが」

「ここを死守だ」

ロツティはバンドンに鋭い目を向けた。

「シャンダイアとソントールの兵力の差は大きい。はつきり言ってしまうえば我が方で陸上の戦闘で使い物になるのはカイザー軍だけと言っても良い。しかも指揮する將軍は俺も含めて数人だ。今、俺達の目の前にいるソントール軍を率いているのは要塞をまかされている将ですらない。こんな相手で引いていたら、どうやって北の将や南の将を倒せるんだ。ましてや大元帥ハルバルトの直属部隊や、ソントール皇帝の親衛隊にどうやって我々の剣の先が届くんのだ」

ロツティは断固としてそう言うのと、独特の形状を持つ三日月型の剣を抜いて星空に掲げた。かがり火を浴びて赤く輝く剣のはるか彼方には、アイシム、バステラの二神がこの星を創り上げた時、最後にバステラ神が手の中に残った塊を放り上げて創った真つ白な三日月がかかっていた。

## 著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

## 作品紹介

[http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel\\_1/chandaia/index.shtml](http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel_1/chandaia/index.shtml)

ちえのみね  
**智慧の峰** — シャンダイア物語 —

---

---

2001年5月8日 第1版第1刷発行

著 者 **福田 弘生** (Hiroo hukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制 作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表 紙 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

---

---

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。  
希望される場合はメール ([master@sf-fantasy.com](mailto:master@sf-fantasy.com)) にてご相談ください。